

東京都心部の中小河川における 名所の変遷とそのまなざしに関する研究

A Study on the transition and characteristics in famous scenic places along small river in the central Tokyo

3605F001-3 伊地知 大輔*

概要：明治以降に刊行された当時の名所を扱った本に記載された175枚の絵画・写真を分析対象とし、東京都心部中小河川の名所の変遷とそのまなざしの特質を明らかにすることが本研究の目的である。名所の変遷については以下の事柄が判明した。埋め立て・暗渠化によって名所の数と絵図の枚数は減少し、絵図に描かれた興味対象は明治、戦前、戦後期で変化が見られた。全時期を通して採録された4箇所ではどれも描かれている風景は変化しており、もともと開けている空間は時代を経るごとに視距離が長くなり、複数の要素を描くようになったのに対し、狭い空間は視距離が短くなり、描かれる要素も限定されたことが判明した。最後に場所の遍歴と採録期間の比較から変遷の要因について考察を行い、4つの要因を明らかにした。

Key Words： 河川景観、名所、近代、東京

1. 研究の背景と目的

1-1 背景と目的

1980年代以降、我が国では都市河川を対象とした都市論や景観論、設計や計画論の研究¹⁾と、その実践例²⁾が蓄積されてきた。しかしこと東京においては、神田川に代表されるような都心部中小河川の風景について具体的な考察がなされているとは言い難い。本研究では河道に空間的余裕がなくデザインの制約が大きい東京都心部中小河川の景観の特質を探り、都市におけるその景観的な意味を考えたい。

何故ならば、変化し続ける都市空間にあって、川は昔から在り続け、都市に住む人間はそうした川とそれぞれの時代において必要とされる付き合い方をしており、中小河川の景観はその結果として現れていると考えられるためである。さらに、そうした中小河川の景観認識の特質を時間的変遷として把握し、そのなかから読み取られる価値や評価を探ることで、現代の中小河川の景観に対する我々の見方を再認識するとともに洗練させていくことに繋がるのではないかと考えるためである。

以上の考えに基づき、本研究では明治以降から現代までに刊行された名所図会・百景に採録されている東京都心部の中小河川を描いた絵図を分析対象にし、都市における中小河川の景観的な意味や時代とともに変遷しているであろう人々の中小河川への見方の特性を明らかにすることを本研究の目的とする。

1-2 研究の位置付け

本研究に関連する既存研究は、以下の2つに大別できる。

(1) 江戸・東京の水辺空間の変遷に関する研究

まず江戸および東京の水辺空間の変遷に関する研究としては、代表的なものに鈴木³⁾や陣内らによるもの⁴⁾がある。これらによって東京の都市空間における水辺の重要性が明らかにされて

いる。

(2) 近代以降に刊行された名所図会・百景を分析対象にした研究

名所図会や百景を分析対象としてそこにみられる親水行為や施設を把握する研究としては、橋本⁵⁾、須藤⁶⁾による一連の研究がある。また名所の変遷から風景の変容を読み取る研究としては、樋口⁷⁾、大宮⁸⁾、馬木⁹⁾、羽生¹⁰⁾の研究がある。

本研究は(2)の後者の研究に類するが、既存研究がいずれも名所全体の変遷に対して考察を扱っているのに対して、本研究では東京都心部の中小河川を対象を限定し、その景観の特質と変容を分析する点に特徴がある。

2. 研究の方法と対象

2-1 研究の方法

本研究は、明治以降から現代までに名所として採録された東京都心部の中小河川の景観の特質と変容を明らかにすることを目的としている。その際、名所として選ばれている場所および景観の構成要素と、その描かれ方との二側面から分析を進める。双方の側面から、時代的な変化を追うとともに、場所による特徴があるか否かを明らかとする。

そのためまず3-2、3-3で、対象とする175枚の絵図について、その場所と絵図に含まれている景観の構成要素の時代的変遷を分析する。

次に描かれ方の分析については、全サンプルを対象とした構図の特徴を大まかに視点のとり方や描かれている領域の広がりなどによって整理してみたが、時代的な特質を統計的に把握することができなかった。それは描かれる場所や対象が時代的に変化していることも影響しているためと考えられる。そこで、明治期から現代までほぼ継続して採り上げられている場所を対

象として、そこを描いた絵図の詳細な分析をすることによって描かれ方の特質および変化を把握することとした(3-3)。

4-1では、描かれた要素が実際に存在していた時期と、その要素が名所として描かれた期間を比較し、興味対象とその描かれ方の変化の要因について考察をした。その考察の結果から得られた要因のひとつである橋梁の架け替えについて、研究対象の名所絵図から抽出した隅田川の橋梁と構造形式の観点から比較し、中小河川の橋梁へのまなざしを考察した(4-2)。

5章でそれまでに得られた考察の成果から、東京都心部中小河川の名所の景観的特性を述べ、最後6章で名所の特徴を備える現代の景観の検討を含めたまとめを述べる。

2-2 研究の対象

(1) 対象の位置づけ

明治期以降に発行された東京の名所図会・百景に採録されている、都市中小河川を構図の内に含む絵図・写真を収集した。なお本研究では「東京都心部の中小河川」の定義を「東京に存在したまたはしている水辺のうち、隅田川・江戸川・多摩川を除く中小の河川と、上水、掘割、江戸城外濠」とする。

中小河川を対象とする理由は、隅田川などの大河川に対して護岸や沿川建物などの構造物の変化によって明治期以降の景観の変化が大きいこと、および水辺のデザインとしてみた場合の制約条件が大きく、その景観を考えるには対象空間の操作だけでなく景観体験の主体である人々の見方や価値観を探ることがより重要となるためである。

また名所図会・百景を研究対象とした理由については、その時代の人々の景観への好みが見れたものとして既存研究においても分析対象として扱われており、明治期以降に刊行された名

表-1 研究対象の名所図会・百景

元号	刊行年		文献番号	文献名	作者・編者など	発行者	媒体		絵図・写真の枚数	
	年	文献番号					絵図/写真	モノクロ/カラー	全体(枚)	2冊以上に採録されている都心部中小河川を構図に含む枚数/全体数(%)
明治	9-14	1	東京名所図	小林清親画	熊谷庄七	絵画	カラー	95	15	15.8
	11	2	東京自慢：名所手続	由利兼次郎編	熊谷庄七	絵画	モノクロ	19	0	0.0
	13-22	3	東京真面目名所図解	井上安治画	文盛堂	絵画	カラー	133	25	18.8
	16	4	東京名所案内：画人	安井乙能編	文盛堂	絵画	モノクロ	61	5	8.2
	17	5	東京名勝図会	岡部啓彦編	文盛堂	絵画	モノクロ	38	3	7.9
	23	6	東京名所指図(雅俗精編)	菅原三編、大槻文彦編	小杉眞治	絵画	モノクロ	20	2	10.0
	23	7	東京名所図録(東雲堂)	東雲堂	東雲堂	絵画	モノクロ	50	5	10.0
	23	8	東京名所図録(双々館)	原田真二編	双々館	絵画	モノクロ	98	7	7.1
	24	9	東京名所	新井康次郎著	井上勝五郎	絵画	モノクロ	16	0	0.0
	25	10	東京名所案内	相沢汎著	東康堂	絵画	モノクロ	87	10	11.5
	29	11	東京名所案内	浅羽齋也編	桜香武香	写真	モノクロ	90	9	10.0
	29	12	東京名所案内	和田庄蔵編	和田文宝堂	絵画	モノクロ	32	3	9.4
	35	13	東京名所写真帖	角井和七編	美博堂	写真	モノクロ	12	0	0.0
	35	14	東京名所写真帖	山田繁蔵編	山田繁蔵	写真	モノクロ	12	0	0.0
	35	15	東京名所	観音寺	田井久之助	絵画	カラー	27	2	7.4
	41	16	東京名所写真帖	いちは書房	小島文市	写真	モノクロ	80	3	3.8
	42	17	最新東京名所写真帖	小島文市	小島文市	写真	モノクロ	70	5	7.1
	44	18	東京風景	小川写真製版所	小川写真製版所	写真	モノクロ	124	7	5.6
	44	19	東京名所写真帖	尚美堂	尚美堂	写真	モノクロ	45	7	15.6
	45	20	東京府名勝図録	田山亮義編	とも急商會	写真	モノクロ	155	5	3.2
大正	5	21	新選東京名所		大橋堂	写真	モノクロ	30	2	6.7
	9	22	東京名所図帖		天正堂画局	写真	モノクロ	30	2	6.7
	7	23	新東京百景	恩地孝四郎他版画	創作版画倶楽部	絵画	カラー	100	12	12.0
戦前	7	24	大東京百景版画集	中島重太郎編	日本風景版画會	絵画	モノクロ	100	7	7.0
	10	25	大東京名所百景写真帖	青海堂	青海堂	写真	モノクロ	95	3	3.2
	17	26	大東京百景写真帖	永瀬米次郎著	青海堂	写真	モノクロ	105	2	1.9
昭和	42	27	東京百景	日野耕之祐著	三彩社	絵画	モノクロ	100	7	7.0
	50	28	新東京百景	富田英三著	スポーツニッポン新聞社出版局	絵画	モノクロ	100	5	5.0
	53	29	下駄の向くまま 新東京百景	滝田ゆう著	講談社	絵画	モノクロ	45	3	6.7
	60	30	新東京風景 ちよっと意外な名所あるき	井出孫六文、石井昌彦画	東京タイムズ社	絵画	モノクロ	51	0	0.0
	60	31	東京の情景	池波正太郎著	朝日新聞社	絵画	カラー	30	7	23.3
	61	32	別冊一枚の絵Vol.19 画集東京百景		一枚の絵株式会社	絵画	カラー	30	3	10.0
	63	33	新東京百景	東京都生活文化局編	東京都生活文化局	絵画	カラー	100	2	2.0
	63	34	東京百景	岩西忠雄画	ART BOXインターアポナル	絵画	カラー	100	7	7.0
平成	8	34	東京百景	合計		絵画	カラー	2280	175	7.7

所図会・百景は写実性も高く、対象景観の特質を考察することができる視覚的資料として適当と考えたためである。

(2) 対象の選定方法

本研究ではまず「東京」「名所」「名勝」「百景」のキーワードに該当する文献資料の中から、以下の3つの条件をすべて満たす冊子を調査対象として選定した。

a) 発行当時の東京の風景を対象とした名所の絵画集または写真集。

b) 解説文のある場合、解説が主になるのではなく、解説ごとに絵図・写真のあるもの。

c) 明治以降に刊行されたもの。

なお、名所の本としては著名な山本松谷の『新選名所図会』は、対象地の多さと編集期間がかなり長期間に渡ることによって研究対象から除外した。

以上の条件で収集したのから、内容が同一のもの、または絵画・写真の黒ずみがひどく判読が困難なものを除いた計 34冊を研究対象にした(表-1)。

次にそれぞれの冊子から、東京都心部の中小河川を対象とした絵画および写真(以降これらを合わせて絵図と呼ぶ)を抽出した。その結果 252 枚の絵図が該当したが、この中から 1冊だけでなく 2冊以上に収録された場所を描いた 175 サンプルを最終的な分析対象とした(表-1)。なお河川の河道内部や水面が含まれていなくても、明らかに対象河川に隣接する場所であるものは含めている。また隅田川に流入する河川の河口部では画面上に隅田川を含むものも対象とした。

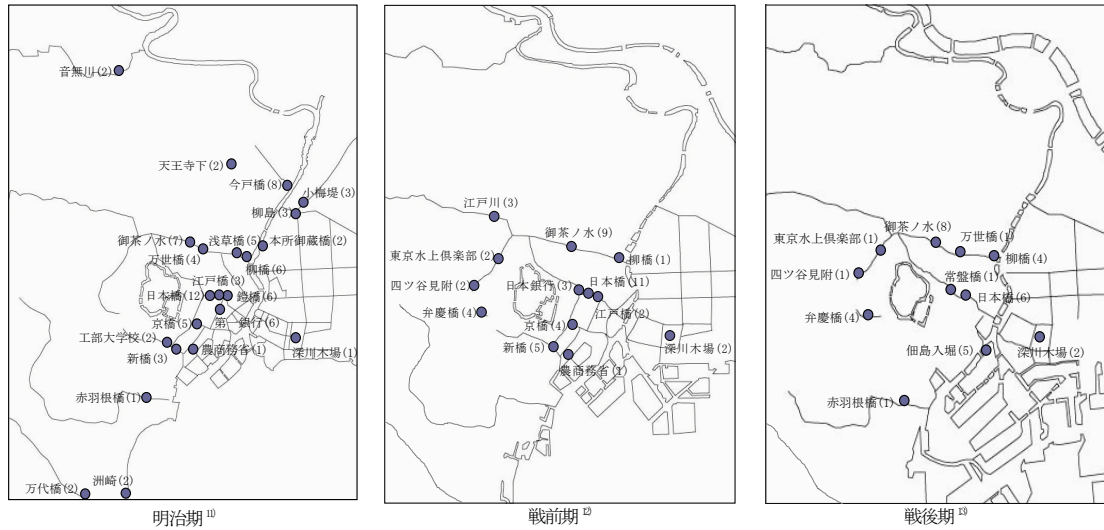


図-1 名所の位置の変遷

3. 名所の変遷の把握

3-1 分析における時代区分

次に分析における時代区分について述べる。大宮⁸⁾の研究によると、近代以降の名所図会・百景全体の描写対象とその描かれ方は、①明治元年から明治20年代②明治30年代から大正期③昭和戦前期④昭和戦後期に分かれるとしている。しかし、中小河川を対象を限定した本研究では、日本橋や御茶ノ水のような代表的な場所において絵図の内容が明治40年代から大きく変化している。また明治36年にスタートした市区改正設計新設計の事業による都市空間の変質が具体的に現れ始めるのが明治40年代以降と考えられる。東京都心部はその後帝都復興事業、戦災復興事業、高度成長期にそれぞれ大きな都市空間の変化が起きるが、大正期と昭和戦前期で顕著な変化が見られなかったこと、また時代ごとのサンプル数の偏りを避けるため、本研究では大きく3区分とすることとした。すなわち①明治期（明治初期から明治30年代まで：サンプル数86）、②戦前期（明治40年代から昭和20年代まで：サンプル数55）、③戦後期（昭和20年代以降現代まで：サンプル数34）である。

3-2 名所の位置の変遷

分析対象の絵図の場所の位置と採録された枚数を時代区分ごとに図-1に示す。図中の括弧内の数字がその時代に採録された絵図の枚数である。これをもとに、東京都心部中小河川の名所の位置の変遷について以下に記述する。

(1) 明治期

主に皇居より東側のエリアに分散して位置しており、小河川の河口あるいは隅田川合流地点に比較的近い場所が採り上げられている。その中でも特に日本橋川周辺が多い。

(2) 戦前期

江戸川と深川木場を除いた全ての名所が、神田川と隅田川と外堀に囲まれたエリアに位置する。また、皇居より西側の外堀に位置する場所が新規に採り上げられている。新橋から日本橋周辺のエリアに名所が増加する一方、隅田川以東のエリアには

ほとんど見られなくなった。また、隅田川沿いに位置する名所が柳橋と今戸橋を残して採録されなくなった。

(3) 戦後期

明治期に多く採録されていた、新橋から日本橋周辺のエリアの名所群が、日本橋を除いて全て採録されなくなった。また佃島の入堀が新規に採録された。

3つの時代区分を通して観ると、採録される場所の数は時代を経るごとに減少しているとともに、分布するエリアも縮小している。その中であって神田川と日本橋川は、御茶ノ水と柳橋、日本橋を中心にどの時期の名所図会・百景にも採り上げられており、東京都心部の中小河川の伝統ある名所と言えるだろう。

3-3 興味対象の変遷

(1) 分析の方法

全時代を通じて絵図に描かれている主要素には、橋・歩行者・舟・建物・水面がある。これらは中小河川景観における人々の興味対象と考えられる。時代ごとにこれらの要素を含むサンプルの割合を算出した。以下要素ごとに特徴を述べる。

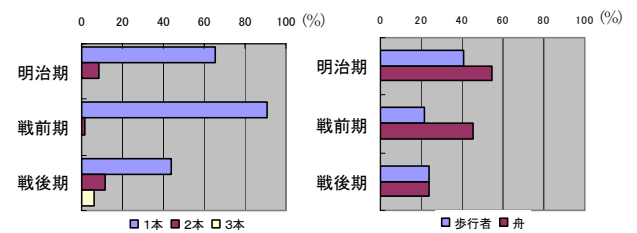


図-2 橋を描いた絵図の割合の変化

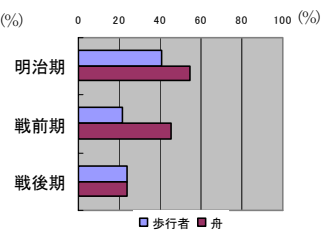


図-3 歩行者と舟を描いた絵図の割合の変化

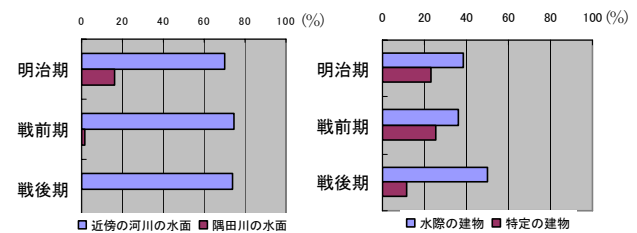


図-4 水面を描いた絵図の割合の変化

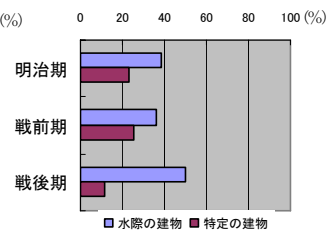


図-5 建物を描いた絵図の割合の変化

(2) 興味対象の変遷

a) 橋 (図-2)

橋は水面と並んでもっとも多く描かれている興味対象である。その割合は戦前期に最も多く、9割以上となる。しかしそのほとんどで橋は1本のみ描かれており、戦後期には2本以上の橋を含むものが増えている。

b) 歩行者と舟 (図-3)

歩行者を含む絵図の割合は時代とともに減少している。特に戦後期では少なく明治期の半数以下である。なお自動車は戦前期と戦後期に見られるがその割合は少なく、主要な興味対象とはなっていないと思われる。舟については、明治期に約4割の絵図に描かれているが、戦前期に半減し、わずかではあるが戦後期にやや増加している。中小河川に存在した舟の数は戦前期の方が戦後期よりも多いと考えられるが、描かれている割合は戦後期の方が多いため、舟が水辺景観において重要な興味対象として注目される程度が高まっているのではないかと推測される。

c) 水面 (図-4)

河川を河川たらしめる最重要な要素ともいえる水面は、時代を通じて常に7割以上の絵図に描かれている。またわずかではあるが明治期よりも戦前期と戦後期の割合が高くなっている。なお水面として隅田川の水面も含むような絵図が明治期には1割近くあったのに対して、戦前期ではほとんどなくなり、戦後期にはまったく見られなくなっている。これは図-1にみられた名所の位置の変遷の結果が現れているといえる。

d) 建物 (図-5)

都市の中小河川の景観では沿川の建物が重要な要素となると考えられるが、建物が描かれる割合は明治期および戦前期に4割弱で戦後期には約5割となっている。またニコライ堂や日本銀行など、特定の建物として識別されていると思われる建物が描かれているのは戦前期に最も多く見られる。戦前期には橋の描かれる割合も最も高く、これら近代建築や近代橋梁が初めて多く出現し新しい水辺景観として人々の興味を惹いたのではないかと推測される。

3-4 描かれ方の変遷

(1) 分析対象地と方法

a) 対象地

3-4 では名所の描かれ方の時代的变化を明らかにするために、3期すべてにわたって描かれた場所を対象として、その絵図の特性を分析する。対象地は場所の特性および描かれた絵図の枚数とバリエーションも考慮して表-2の4箇所とした¹⁴⁾。

表-2 3-4の分析対象地

河川・濠	分析対象地
神田川	御茶ノ水(24)、柳橋(10)
外濠	弁慶橋(10)
日本橋川	日本橋(28)

b) 分析方法

分析対象の絵図から、描かれている主な都市要素を抽出するとともに、視点の位置と視対象としている領域を地図に落とし、視距離・水平画角を測定した。そのデータと絵図の特徴から、同様の描き方をしていると思われるものをタイプに分けた。

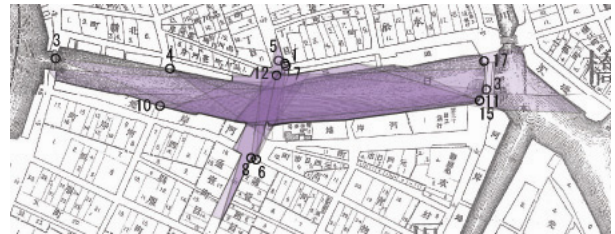


図-6 明治期日本橋の絵図の視点と視野¹⁵⁾

(2) 描かれ方の変遷

以上の分析の結果から、描かれている主な興味対象とその描かれ方に基づく絵図のタイプの出現時期を図-7にまとめた。図-7によって、永らく名所と認識されていた4箇所において、それぞれどのような特徴をもった絵図が描かれたか、また、その出現時期がいつからいつまでであるかが把握できる。この分析結果より、見通しの効く御茶ノ水および弁慶橋と密集市街地の柳橋および日本橋で描かれ方の変遷に相違があることが読み取れる。

すなわち、見通しの効く場所、御茶ノ水と弁慶橋では、橋梁や高速道路やビルなど空間構成要素が時代を進むにつれて増加したが、それら複数の要素を既存の要素と組み合わせ描いたものが現れてきた。また、最長視距離が時代を経るにつれて長くなっている。これに対して密集市街地の日本橋では河岸や通りの街並みが、柳橋では隅田川や柳橋附近の建物がかつては多く描かれていたが、次第にそのような空間構成要素は、描かれなくなり、描く要素が橋や船宿などに限定されていく。また視距離が時代を経るに連れて短くなっていった。

4. 変遷の要因とまなざしの特性の考察

4-1 場所の遍歴と採録期間の比較

(1) 分析対象と方法

3章から、中小河川の名所の評価のおおまかな構造として、実空間の変化が興味対象の変化に影響を及ぼし、描かれ方が決定することが予想される。従って4章では、実空間の変化と興味対象・描かれ方の関係を明らかにするために、4枚以上の絵図に描かれた要素(興味対象)について、実際に存在した期間と描かれた期間を比較し¹⁶⁾、その2つの期間がほぼ一致するもの、後から描かれたもの、ある時から描かれなくなったものに分類した。その結果を表-3に示す。ただし、通りの街並みを主題のひとつとして描いている日本橋の絵図の一部・京橋・新橋の絵図については明解な比較が困難であるので、分析の対象外とした。

場所	明治																	大正																	昭和戦前																	昭和戦後・平成																																															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99
御茶ノ水	<p>構成要素：神田川水面・橋の袂 視点の位置：アイレベル 視点の高さ：約250m 最長の視距離：約45° 水平面角：約45°</p> <p>構成要素：神田川水面・御茶ノ水橋 視点の位置：旧御茶ノ水橋から100m以内</p> <p>構成要素：神田川水面・丸の内線橋梁 視点の位置：丸の内線橋梁 視点の高さ：約400m 最長の視距離：約40° 水平面角：約40°</p> <p>構成要素：聖橋 視点の位置：聖橋から200m以内</p> <p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p> <p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p>																	<p>構成要素：神田川水面・JR御茶ノ水駅・聖橋 視点の位置：御茶ノ水橋の北側の袂 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：300~500m</p> <p>構成要素：神田川水面・丸の内線橋梁 視点の位置：丸の内線橋梁 視点の高さ：約400m 最長の視距離：約40° 水平面角：約40°</p> <p>構成要素：外堀水面・ホテルニューオータニ・高層道路・ビル群 視点の位置：約600m 最長の視距離：200m~600m</p>																	<p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p> <p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p>																	<p>構成要素：神田川水面・船宿 視点の位置：柳橋より上流側 最長の視距離：50m~250m</p>																																															
弁慶橋	<p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p> <p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p>																	<p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p> <p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p>																	<p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p> <p>構成要素：水際の樹木・弁慶橋・対岸 視点の位置：外堀南側、弁慶橋より西 視点の高さ：アイレベル 最長の視距離：約300m 水平面角：約30~40°</p>																	<p>構成要素：神田川水面・船宿 視点の位置：柳橋より上流側 最長の視距離：50m~250m</p>																																															
柳橋	<p>構成要素：柳橋・隅田川・隅田川対岸 視点の位置：柳橋付近の上流側 最長の視距離：250m~400m</p>																	<p>構成要素：柳橋・隅田川・隅田川対岸 視点の位置：柳橋付近の上流側 最長の視距離：250m~400m</p>																	<p>構成要素：柳橋・隅田川・隅田川対岸 視点の位置：柳橋付近の上流側 最長の視距離：250m~400m</p>																	<p>構成要素：神田川水面・船宿 視点の位置：柳橋より上流側 最長の視距離：50m~250m</p>																																															
日本橋	<p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p> <p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p>																	<p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p> <p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p>																	<p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p> <p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p>																	<p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p> <p>構成要素：日本橋・歩行者 視点の位置：日本橋の橋詰 視点の高さ：1枚を降き低層 最長の視距離：250m以下</p>																																															

図-7 明治期から戦後期まで継続して採録された場所の描かれ方の変遷

描かれている絵図の枚数 1枚 2枚 3枚

表-3 興味対象と描かれ方の変化と考えられる要因

採録期間と実際に存在した期間 2つの期間 の比較	採録期間		興味対象		描かれ方		興味対象・描かれ方の 変化の要因	
	明治	戦前	場所	空間要素	視点の位置と視線の方向	水面		
ほぼ一致	○	○	○	浅草橋 (旧)浅草橋	橋梁	橋梁	○	架け替え
				御茶ノ水 (旧)御茶ノ水橋	橋梁	橋梁	○	架け替え
				万世橋 (旧)万世橋	橋梁	橋梁	○	架け替え
				御茶ノ水	神田上水懸橋	橋梁	○	神田上水の廃止
				第一銀行	第一銀行・高運橋	建築	×	建築の建て替え
				農商務省	農商務省・聖橋	橋梁	×	建築の建て替え
				日本橋	(旧)日本橋・魚河岸	橋梁	○	関東大震災による魚河岸焼失
					(旧)弁慶橋	橋梁	○	-
					(旧)弁慶橋	橋梁	△	周辺建物の高層化に伴い、ひきの距離をとるための視点場の移動
					超層ビル・高速道路	橋梁	×	高速道路によってひきの距離がとれなくなった
前方一致(ある側から採録されなくなった)	○	○	○	日本橋	(現)日本橋	橋梁	○	高速道路によってひきの距離がとれなくなった
				御茶ノ水	(現)日本橋・高速道路	橋梁	×	-
				御茶ノ水	聖橋	橋梁	×	-
比較不可	○	○	○	日本橋	街並みと橋	橋梁	○	-

(2) 考察

興味対象と描かれ方の変化は、実空間の要素自体が消失して描かれなくなったものを除き、以下に示す4つの要因が考えられる。

a) 建物の高層化と高速道路の建設による視距離・視界の変化

建物の高層化や高速道路の建設などによって、眺めるのに必要な視距離・視界に変化が生じ、描き方が変化した。つまり3-4の分析により明らかになった事柄が本節でも確認されたといえる。

b) 橋の架け替え

浅草橋、御茶ノ水橋、万世橋は現在までに幾度かの架け替えを経ているが、名所の絵図に描かれているのは明治期に架橋された橋のみであった。詳しくは4-2で述べる。

c) 川に面した建物の建て替え

第一銀行、農商務省はその後建て替えられている。b)と同様に、名所の絵図に描かれているのは、明治期に建造された建物のみだった。洋風建築のデザインの新規性と新しい行政の中核機能に人々が名所としての意味を付与していたことが予想される。

d) 近世以来の水上施設への再評価

戦後期の柳橋、佃島は舟と木造の船宿を、戦前期から戦後期の深川木場は木材を扱う様子を描いている。これらは近世から始まり、明治期以降にも存在したが、絵図には継続的に描かれていない。従って、特に戦後期は近世以来の水上施設を評価しようという姿勢が見られたと言える。

4-2 主要な橋梁の変化と採録の関係

(1) 分析方法

本節では中小河川の橋梁の変化と採録の関係を明らかにするために、他の主要名所における橋梁と中小河川の橋梁について、4-1と同じく、存在した期間と採録された期間の相違の観点から比較して考察する。まず研究対象の名所図会・百景が掲載しているすべての名所絵図についてその描画対象地をリストアップする。その中で、5冊以上に採録されており、かつ3章で分析対象としなかった隅田川など河川幅が100m以上ある大規模な都市河川に架設された橋梁を抽出し、それらと前節で抽出された御茶ノ水橋、浅草橋、万世橋とを比較し、考察を述べる。

(2) 神田川の橋梁 万世橋・浅草橋・御茶ノ水橋

表-4 神田川3橋の構造形式の変遷

年号	年	構造形式		
		万世橋	浅草橋	御茶ノ水橋
明治	6	石造アーチ(眼鏡橋)		
	7		石造アーチ	架橋なし
	17		ボウストリングトラス	
	24			錬鉄製フラットトラス
	31		鋼製2ヒンジアーチ	
	36		鋼製アーチ	
昭和	5	コンクリートアーチ	鋼製2ヒンジアーチ	
	6			3径間鋼製ラーメン・ゲルバー桁

■ : 描かれたもの □ : 描かれなかったもの

3橋の構造形式の変遷を示した表-4より、形式が石造アーチとトラスから鋼製アーチとラーメンに移行する時期が、名所として描かれる/描かれないの境界であることがわかる。石造アーチ橋は、江戸城見附の榊形櫓を取り壊した際にその石垣を再利用して作られた橋だが、交通施設の近代化以上に明治政府による江戸のイメージの払拭が意図されたこととされ¹⁷⁾、当時の人々にとって極めて衝撃的な変化であったと思われる。

次に、トラス形式はそれ自身が当時珍しい上に、構造が都市風景の中で目立ちやすいことが描かれた要因と推察される。しかし実際にはその後橋梁のデザイン思想が変化¹⁸⁾して、上路アーチが選ばれるようになり、その結果逆に橋を眺める一般大衆にとっては都市風景に埋没した印象になったのではないだろうか。またラーメン形式の昭和の御茶ノ水橋は、単体としても隣りの聖橋や、描かれない駅など他の要素との関係においても、優美さで比べて劣るように見えたことが最大の要因のように思われる。

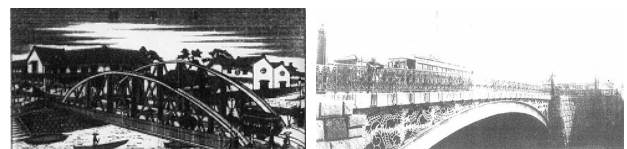


図-8 浅草橋 (左: 明治17年竣工、右: 明治31年竣工)

(3) 隅田川の橋梁 吾妻橋・両国橋・永代橋・清洲橋

研究対象の名所本に採録されたすべての絵図について、その主題となる描画場所をリストアップしたところ、中小河川以外の川の主な橋梁は、隅田川の吾妻橋・両国橋・永代橋・清洲橋の計4橋だった(表-5)。それらの橋梁について構造形式の変化と採録期間を示したのが表-6である。

表-5 研究対象の文献における主要橋梁の採録数

	発行	明治											大正				昭和戦前				戦後									
		9	11	16	17	23	23	24	25	29	35	35	41	42	44	44	45	51	9	7	7	10	17	42	50	53	60	61	63	68
吾妻橋	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1													
両国橋	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1													
永代橋	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1													
清洲橋																		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表-6 隅田川4橋の構造型式の変遷

年号	年	永代橋	吾妻橋	両国橋	清洲橋
明治	9	洋風木橋		トラス補強の洋風木橋	
	20		洋風木橋		
	30	3径間曲弦プラットラス	直弦プラットラス		
	37			3径間曲弦トラス桁	
大正	15	鋼バラスト・タイドアーチ(下路)			
昭和	3		3径間鋼アーチ		自定式吊橋
	7			上路ゲルバー桁	

■ : 描かれたもの □ : 描かれなかったもの

表-6 から、隅田川の4橋の名所本における採録の有無は、大正15年から昭和7年の間に架設された帝都復興橋梁の形式によって違いがみられる。帝都復興の以前に描かれていたものはすべて下路橋であった。そして帝都復興後も描かれ続けた永代橋と清洲橋は下路橋であったのに対して、描かれなくなった吾妻橋と両国橋は上路橋である。これらはそれまで地上から眺めて圧倒されるような巨大なトラスが無くなり橋面の上に構造が無い上路橋になったことが、人々の注目を集めなくなると想像できる。これに対して永代橋と清洲橋はその架設位置から意図的に下路橋で計画されたことを伊東らは述べており¹⁹⁾、名所のまなざしはその意図にきちんと応えていたといえよう。

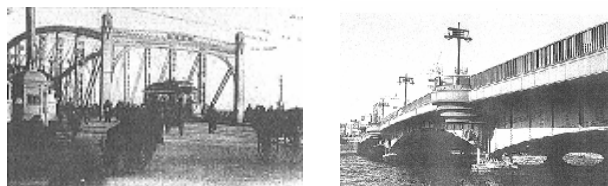


図-9 両国橋 (左: 明治37年竣工、右: 昭和7年竣工)

(4) 考察

(2)と(3)の分析結果を比較して、中小河川における橋の変化と採録の関係を以下に述べる。

神田川と隅田川双方で下路橋が描かれる傾向がみられたことから、一般的な都市河川においては下路橋が描かれやすいと思われる。帝都復興まで多くの絵図に描かれていた隅田川橋梁に比べ、中小河川の橋梁は明治時代半ばのデザイン思想の変化により多くの橋が上路橋になり、名所としてのまなざしが向けられなくなったのではないだろうか。

明治半ばから上路橋が描かれている旧御茶ノ水橋は、隅田川に見られない都心部中小河川の特徴を示している。プラット・トラスの旧御茶ノ水橋に名所としてのまなざしが向けられたのは、渓谷状の地形によって橋の構造体が見えやすく、上路橋のトラスの構造美に意識を集めたためと考えられる。現在の聖橋が、架設当初から現在までの名所絵図に描かれている要因も同様のものと思われる。

5. 東京都心部中小河川の名所の景観特性

以上の分析と考察をまとめ、名所の景観特性を興味対象と眺め方の観点から明らかにする。

5-1 興味対象

まず近傍の水面はどの時代区分においても70%以上の絵図に描かれており、主要な視対象である。

次に、橋はどの時代区分においても常に60%以上の絵図に描かれてきたことから、水面の次に最も主要な興味対象である。また名所として描かれる橋とその周辺の空間にはある特定の関係があるように思われる。すなわち、ある程度の空間的広がりがあり、水平面での地形的変異がさほど見られない場所では、目立つ下路橋が描かれやすい。一方、御茶ノ水のような渓谷状の地形においては、力学的な理由から上路橋も架けられる事が多いが、その橋は地形と一体となった視対象とし認められやすく、名所として描かれやすい。

水辺に面して建つ建物は、建物の名称など、それが何の建物であるかを特定できるものが一定の割合で描かれている。明治期では、図-10に示すような橋と建物がセットでかつ同様の視点から描かれている例が見られる(表-3の第一銀行と農商務省)。また、建物が高層化した戦後期では、直接水辺に面している建物ではないが、周囲に建つ特徴的なビルを、ひきの距離をとって描いている。



図-10 海運橋と第一国立銀行

舟を描く絵図は時代とともに減少している。明治期では舟が橋梁など他の主題とともに構図に収められていたが、戦後期になると、近世から続く舟溜まりの舟を主題にして描いており、舟へのまなざしが水運が盛んだっころへの懐古的なものに変化していると思われる。

5-2 眺め方

(1) 建物が密度高く立地している場所

建物が密度高く立地している場所である日本橋と柳橋の眺め方の概要を図-11に示す。

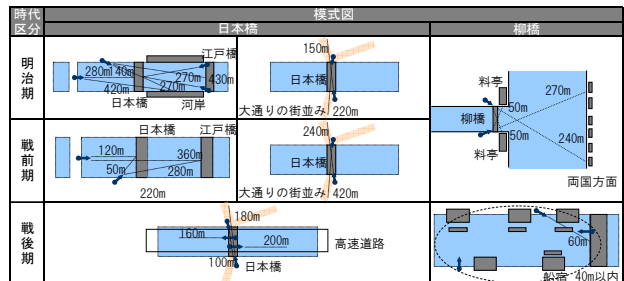


図-11 建物が密度高く立地している場所における眺め方の概要

眺め方の特徴は以下の2つに大別される。

1つ目の特徴は、戦前期までの眺め方は特定の視対象まで200mから400m見通していることである。それを可能にしているのは視点場の位置だと考えられる。その位置とは、まず第一にその場所を代表する橋の橋詰である。日本橋では戦前期まで歩行者が滞在できる橋詰空間が広く、また高速道路が上空に無

かったため、戦後期と比べ橋から離れて橋を含めた周辺を眺めることができた。また柳橋においては、橋詰の花柳街の料亭を含んだ構図が多く、橋詰の建物の意味と意匠が重要であることが伺える。第二は隣の橋とその橋詰であり、そこからの流軸方向の眺めを確保することは、長い距離を見通し、橋周辺の場所の様子を捉えることを可能にする。

2つ目の特徴は、橋から伸びる通りの様子と街並みが多くの絵図に橋と共に捉えられていることである。橋詰から、橋を前景にどのように通りが見えるのかが重要になっている。

(2) 河川幅があり、流軸方向に見通せる場所

河川幅があり、流軸方向に見通せる場所である御茶ノ水と柳橋の眺め方の概要を図-12に示す。

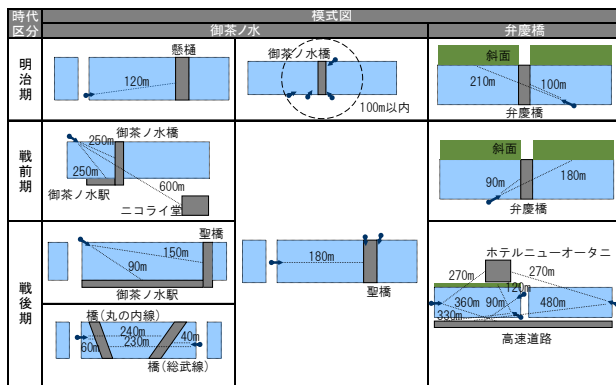


図-12 河川幅があり、また流軸方向に見通せる場所の眺め方の概要

明治期は特定の要素への視距離が100mから200mであったが、戦前期から複数の要素を組み合わせて眺めるようになり、視距離も200mから600mと様々な眺め方がうまれた。このように明治期以降の空間の変化によって眺め方が様々に変化しており、またこれからもすることが予想され、このことが一貫して名所となっている大きな要因と考えられる。

このような眺め方の多様性を可能としているのは次に述べる3点であろう。1点目は、そもそも都心部において珍しい起伏のある地形と両岸間の距離の大きさである。その特徴を活かし、明治期以降の激しい空間の変貌の中で、最も魅力的と思われる構図が選り採られてきた。2点目は、視点場の豊富さである。2箇所とも河川の片岸が道路であり、視点場となりえる場所が多い。また御茶ノ水は橋梁の数が増えていくことで流軸方向の眺めにも多様性がうまれた。3点目は、橋梁や駅などの主要要素の意匠とスケールである。視対象となる主要要素は、多様な角度からの視線に耐え、また近接する要素との関係において目立ちすぎない意匠がなされている。また都市の要素のスケールが、河川空間のスケールを圧倒的に凌駕していないことも重要な事項と考えられる。

6. まとめ

6-1 得られた成果

以上、東京都心部中小河川を描いた名所絵図の景観論の立場から分析・考察した結果、本研究の成果として以下が得られた。

- ・場所の位置・興味対象・描かれ方の3つの観点から名所の変遷を明らかにした。
 - ・名所の変遷についてその要因を明らかにした。
- 本研究では、これらの成果を総合したものが東京都心部中小河川へのまなざしと考えている。

6-2 名所の特徴を備えている現代の景観

最後に以上の成果に基づいた現代の中小河川における名所となり得る景観を考える。すなわち、都市中小河川への眺め方として次の2点を有する場所を検討する。

- ・場所自体に近世からの特徴的な歴史性があり、かつ狭小な空間に舟などの特異な要素が存在する。
- ・視軸が通って複数の特定できる要素が見通せる。

ここでは例として後者の特徴を持つ現代の都市中小河川の景観を図-13に紹介する。

この3箇所における景観は、どれも河道方向の視界がある程度確保できる場所において、多くの人々が特定できる東京都庁とホテルフォーシーズンを捉えている。この特徴は、その空間の広がりゆえに建物の高層化に伴うひきの距離の変化に対応した、中小河川の現代的な眺めであるといえよう。

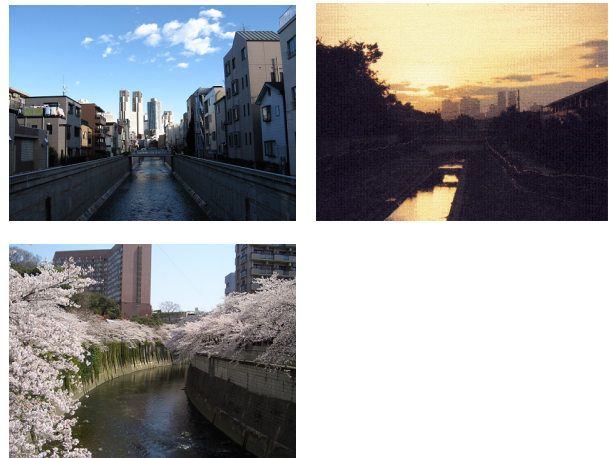


図-13 名所の特徴を備えている現代の景観

(左上：神田川中野新橋周辺から都庁(三宅祐司撮影)、右上：善福寺川大松橋から都庁、神田川駒塚橋付近からホテルフォーシーズン(平山隆太郎撮影))

6-3 今後の課題

本研究は中小河川の名所における景観を概略的に扱ったものであり、個々の空間構成要素に対する当時の人々の評価まで詳細に考察していない。

また、中小河川景観の研究において、従来行われ蓄積されてきたような空間の変遷や沿川における人々の振舞いに関する研究だけでなく、景観の捉え方の側面からの更なる研究が望まれる。その中でも特に現代の名所の発見とその評価について考察を重ねていくことは河川空間のあり方を論じる上で重要な論点になる得ると思われる。

参考文献及び注

- 1) たとえば、中村良夫・北村眞一(1988)：「河川景観の研究および設計」,土木学会論文集第399号 II-10 pp.13-26
- 2) 河川景観設計の代表例である太田川基町護岸(土木学会デザイン賞特別賞)の施工が1980年代前半である。
- 3) 鈴木理生(2003)：「図説 江戸・東京の川と水辺の事典」,柏書房
- 4) 法政大学大学院エコ地域デザイン研究所編・陣内秀信監修(2004)：「エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン」,学芸出版社,pp.79-106
- 5) 橋本政子・堀繁(1997)：「江戸の河岸における水辺のデザインとその規範に関する研究」,都市計画学会論文集No.32,pp.283-288
- 6) 須藤順平・渡部一二(2006)：「広重の描いた『名所江戸百景』にみる水辺空間の構成に関する研究」,ランドスケープ研究69(5),pp.725-730
- 7) 樋口忠彦・杉山公彦(1982)：「明治期東京の名所の変遷過程について—名所絵を対象にして—」,昭和57年度第17回日本都市計画学会学術研究発表会論文集,pp.511-516
- 8) 大宮直記・下村彰男・熊谷洋一(1995)：「名所図会・百景にみる近代以降の東京における「景」の変遷に関する研究」,ランドスケープ研究58(4),pp.429-437
- 9) 馬木知子(2004)：「名所本にみる近代東京の都市風景の変容について」,ランドスケープ研究67(5),pp.623-628
- 10) 羽生冬佳(2005)：「明治以降戦前までの東京の名所の成立・変遷に関する研究」,ランドスケープ研究68(5),pp.843-848
- 11) 国土地理院発行「大正8年測量20万分の1地勢図」より作成
- 12) 国土地理院発行「昭和9年測量20万分の1地勢図」より作成
- 13) 国土地理院発行「平成9年測量20万分の1地勢図」より作成
- 14) 弁慶橋は初めて描かれるのが明治44年であり,戦前期に区分されるが,その絵図の内容から,明治期の特性を継承していると判断し,3-4での分析対象とした。
- 15) 日本地図選集刊行委員会企画編集(1969)：「明治二十年内務省実測東京五千分ノ一」,人文社より作成
- 16) 描かれた空間要素が実際に存在した期間について以下の文献を参考にした。
石川悌二(1977)：「東京の橋 生きている江戸の歴史」,新人物往来社 / 伊東孝(1986)：「東京の橋 一水辺の都市景観」,鹿島出版会 / 中央区教育委員会社会教育課文化財係編(1998)：「中央区の橋・橋詰広場 中央区文化財調査報告書 第5集」,中央区教育委員会社会教育課文化財係 / 加藤藤吉(1929)：「柳橋沿革史」,柳橋開橋祝賀会事務所 / 秋永芳郎(1975)：「江戸東京 木場の歴史」,新人物往来社 / 魚河岸百年編纂委員会(1968)：「魚河岸百年」,日刊食料新聞社 / 台東区企画部広報課編(1997)：「新版 下谷・浅草 史跡をたずねて」,台東区 / 初田亨(2001)：「繁華街にみる都市の近代—東京」,中央公論美術出版 / 坂田正次(1987)：「江戸東京の神田川」,論創社 / 鉄道会(1932)：「御茶の水両国間高架線建設概要」,鉄道省 / 帝都高速度交通営団運輸課監修,折込広告社・春光社・インターナショナル宣伝企画編集(1954)：「新地下鉄誕生 御茶ノ水池袋」,折込広告社 / 都市研究会編(1980)：「街 明治大正昭和 絵葉書にみ

- る日本近代都市の歩み 1902-1941 第2」,都市研究会 / 木村荘八(1958)：「東京繁昌記」,演劇出版社 / 増山武男(2006)：「-文化財で綴る- 佃島物語」,丸善出版サービスセンター
- 17) 鈴木理生(2006)：「江戸の橋」,三省堂,pp.238-249
 - 18) 前掲16)の伊東の著書 p.40 に,東京市橋梁課長の樺島正義の話として,「明治の中期になってからは,市街橋として架設地の条件が許すならば大抵拱橋(アーチ橋)とした。彼の拱の優雅なる曲線は概して環境と調和し,殊に上路橋型が多いので,彼の構桁(トラス橋)の下路橋に見るが如き,橋上の展望を阻害し,狭隘を感じしむるやうな欠点が無いので,此種の橋梁は其後続々建設せられた」とある。
 - 19) 前掲16)の伊東の著書 pp.102-116 に,隅田川の第一橋梁であった永代橋は帝都を代表する水路に屹立する‘帝都の門’として,筋骨隆々した男性美を想わせる橋として当時から注目され,また第二橋梁であった清洲橋は,優雅な下垂曲線が女性的な橋を連想させるように演出されたことが述べられている。